

「クチナシ」

廣瀬清一 事務局

世俗の騒動をよそに、季節は着実に移っていく。
雨上がり庭隅に、真白い可憐なクチナシの花がコロナ禍でふさがちな気分を癒すように甘く香っていた。

荒井由実『やさしさに包まれたなら』(1974年)の歌には、

『 ……

雨上がりの庭で くちなしの香りの

やさしさに包まれたなら きっと

目にうつる全てのことは メッセージ 』とある。

香りの良い花を咲かす樹木の中でも、春の沈丁花(ジンチョウゲ)、夏の梔子(クチナシ)、秋の金木犀(キンモクセイ)は「三大香木」と呼ばれている。

クチナシは、6~7月の丁度梅雨の時期に、目に留まる真白な一重や八重の花を次々に咲かす。花びらはやや肉厚で上品である。

花は、開花当初は純白だが翌日には黄色味を帯びてしまう。このように花持ちが短いため、切り花として花屋に並ぶことは少ない。それでも、インターネットの花販売サイトを覗いてみると、いくつか取り扱いがある。

さすが専門家が育てた花には「豊潤な香り、肉厚のオフホワイトの花びら、品があり控えめで気高い雰囲気があり、こんなにきれいな花だったのかと驚いた」との発注者のコメントがある。

欧米では人気があり、香りがジャスミンに似ているということでケープジャスミン(cape jasmine)とも呼ばれ、以前はダンスパーティーに誘う女性へ贈る花として、また結婚式のブーケに使われたようだ。

クチナシは、常緑性の低木で、高さは1~2mで日本の関東以西の庭によく植えられている。



白玉花 (クチナシ)

「花彙」1765年

甘い香りをもつクチナシの花は、食用としても楽しめる。萼(ガク)の部分を取り除いて、花びらだけをさっと湯通しして、三杯酢で食べるのがおすすめとある。また、花はシロップ煮にしてデザートとして、葉は焙煎すれば香ばしいお茶になる。

八重咲きのもは実がならないが、一重咲きのもは秋に赤味のある黄色の実ができる。5~7稜があるラグビーボールに似た楕円形で、片方に萼が刺のように残る特徴的な形をしている。

実が開裂しないので「口無し(口が無いから喋らない秘密を漏らさない)」という和名が付いたとの説があるがよく分からない。

また、将棋盤や碁盤の脚は、このクチナシの実を模っており、打ち手は無言、他人の口出しも無用ということを表していると言われる。

乾燥した実は、飛鳥時代から染料や着色料として使われた。今でもお菓子の色着け、漬物や、おせち料理の定番「栗きんとん」や「栗の甘露煮」の発色を良くするのにも使われている。

日本の伝統色(466色)の中に「支子色」があり「不言色(いわぬいろ)」とも呼ばれ、やや赤味がかった黄色で落ち着いた雰囲気がある。

そして生薬・漢方薬としては「山梔子(さんしし)」といわれ消炎・利尿剤などに用いる。



支子色 クチナシの実
(日本の伝統色)

クチナシの名は、奈良時代の「日本書紀」に「支子」、平安時代の「新撰字鏡」に「久知奈志」と出てくる。

また「梔子」の表記は中国にならったもので、中国では「卮、卮」はジョッキ型の酒器を表し、クチナシの実の形がこの器に似ていることによるとある。

中国では、百合、菊、水仙などとともに、天下の名香花「七香」のひとつとされているが、日本ではクチナシは香りよりも、染料や薬を中心に利用されてきた。

クチナシの学名は *Gardenia jasminoides* である。

Gardenia は、最初にこの花を記録した医者「ガーデン(Dr. Alexander Garden 1730-91)」にちなむ。

jasminoides は、「ジャスミンのような香りがする」を意味する。

フレグランスや香料関係者の間では、クチナシよりガーデニアと呼ぶことが多い。

ガーデニアの花は、チュベローズ、ココナッツ、モモが混じった滑らかなクリーミーなジャスミン調(*cis*-Jasmine lactone)に、特徴的なフルーティグリーンノート(*cis*-3-Hexenol, *cis*-3-Hexenyl tiglate)、スパイスとオレンジフラワーが合わさった優しい甘いフローラルの香りである。透明感のある柔らかなトロピカルな甘さがエキゾチックに感じられる。

ガーデニアはその優れた香気のために天然の花からの抽出が数多く試みられてきた。しかし、収率が低いなどの理由でガーデニアの精油は市場に出てくることはまれである。

ガーデニアをモチーフにした香水は、「Gardenia Chanel (1925)」をはじめ、「Jour d' Hermès Gardenia Hermès (2015)」「Flora Emerald Gardenia Gucci(2019)」「Gardénia Antigua Giorgio Armani (2020)」と絶え間なく発売されている。

昼に目を惹くのではなく、夕刻より蕾を開いてひそやかに香り始めるクチナシの香りは、人を優しく包み込んでくれる。

薄月夜 花くちなしの 匂ひけり 正岡子規
今朝咲きし くちなしの又 白きこと 星野立子

いまだに、いろいろな制約を強いられ大変な状況にある。

そんな時にも、植物は精一杯健気に生きている。それに気付ければ、元氣もわいてくる。

参考文献

- 1) 中野進 「花と日本人」 2000 花伝社
- 2) 湯浅浩史 「日本人なら知っておきたい 四季の植物」 2017 筑摩書房
- 3) 湯浅浩史 「植物ごよみ」 2004 朝日新聞社
- 4) 香料 232、60-61、2006 日本香料協会
- 5) 島田充房、小野蘭山、大路儀右衛門 「花彙」 1765